

42) *Lindernia pierreanoides* 分布はタイに限られていたが、パリー博物館から寄贈された *Solophyllum ilicifolium* の標本に混って本種があるのを見つけた。タイ以外では初めての記録である。パリー博物館の標本を調べると、ベトナムの Cochin China にも本種らしいものがあるが、正確な場所がわからないのでここには引用しない。

○岡村金太郎先生回想録 (小林義雄) Yosio KOBAYASI: Recollection of Dr. Kintaro Okamura

この文の草案をつくるために、わが蔵書中から久し振りで先生の遺稿集を出して見ると、次の名刺が貼ってあった。“武蔵野会長鳥居竜蔵博士の御厚意により遺稿集の御恵与に預りましたので一部特贈申し上げます 岡村金太郎”。これは珍らしい。天国から贈呈されるとは。いや、海藻の先生だから竜宮城からかも知れないが、珍文、奇文、江戸っ児らしい歯切れのよい文がつづいている。その一つを少々長くなるがここに再録する。

荒川花不見の記 (大正 2 年 4 月 13 日認む)。維時大正 2 年 4 月 13 日、時恰も春風駘蕩の候、船を墨田の下流に糺し、花を荒川に観ると云ふ一件で、我が水産講習所開びやく以来未嘗て有らざるの盛挙。幹事の肝煎は非常なもので、わざわざ好日和を撰んでの下検分。先づ船を何処そこの岸へ繋いで、茶屋は何々の奥座敷を四間ブッ通し、酒は劔菱男山、料理の八百善は動かぬ所、甘党の不平の無い様には風月と森永に御用を命じ、鮎

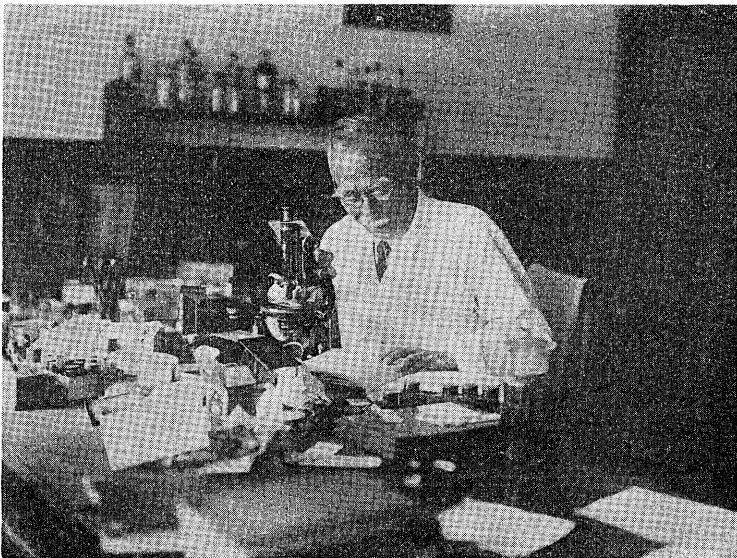


図 1. 水産講習所の研究室にて (1934, 10, 19). 顕微鏡に黒枠の葉書が貼ってある。

は與平、菓物は水紋、夫から罐詰に福神漬と、まるで遠洋航海にでも出懸る様な支度。そして、橋から小舟をいそがせてと云ふ注文もあったれど、夫では余り俗だと云ふので、ズット工夫を凝らして、船は御手前物の七号艇で、ガタガタの発動機船、只不足なのはタボなれど、之は涼闇中と云ふ所で二一天作、然し、小沢さんの粋な喉に端唄や二上りを唄はせ、深尾さんの都々逸に磯節や深川節、金沢さんのかっぱれにステテコ、池上さんのマセマチカルダンスなんと来ては、何れも天下一品で、トテモ真似手がなく、千秋楽は西山さんの老松か何かで、一声張り上げて貰えば、大抵の芸者はいらぬこと、ナンナラ外の座敷も手伝ってやらうというイヤハヤ大変な勢。扱当日八時半迄に佐賀町の水難救済会に集って、船が荒川に着いたら、誰々は菰かぶりを提下げ、誰々はゴザを抱へ、鯨や菓物の風呂敷包は誰々が持って上ることと、万事万端抜目なく、手筈を定めて、早く当日の来よかしと、一日千秋の思ひ。扱土曜日の夜は、実に春宵の一刻も待ち遠く、之が小学の生徒なら、一番鳥からハネ起きて、母親に叱られる所なれど、相当の年寄りだけに起きもやらず、覚むる枕に耳傾けて、あたりのけはひを覗へば、ハテ不思議、宵の程迄冴えたりし月も影をかくし、瀟湘の夜の雨しきりに降って遠寺のかねも聞こえず、風はおどろに雨戸を打つ木の葉も恐ろしく、実に鬼一口の雨の夜の物凄さ、翌朝となって、雨は止みたれど、東北に風立ちて西南に雲静かならず、花に来て袷羽織の弥生中央にありながら、北風膚をさいて外套の襟を立つると云ふ仕末。こんな事だから行政整理があるなんて誠に悪い年と、愚痴をこぼしながら、刻を期して来て見れば集るもの僅に2人、三春の約をたがわぬは只花のみ、幹事も来ねば船も来ず、マルデ狐につままれたと云ふ形、夫れ蓋し余り準備が出来過ぎたから、斯んな事になった次第で、兎角物事は斯うしたもの、陽明門のさかさ柱も余り十分に出来上るを魔がさすと云ふので、サカサにしたと云ふから、我が水産の花見の計画も、余り用意の十分過ぎた処から、斯くの仕合。然し花は満開よりも三分の咲を賞し、月も隈なきをのみめづるにもあらねば、足らぬ所が却って与興も深い訳と、理窟をこねて見れば、イッソ花見に行かぬ方が、矢鱈に喰って腹も痛まず、懐も冷えぬ道理で、ヤッパリ罐詰の尻をタタイたり、ミジンコの戸籍を調べたりして居るのが、各自共の身上かも知れずと、今の今迄荒川の堤へ飛んで行った魂を呼戻して、我に返って考へて見れば、今朝より一層寒さが増した様だと、家に帰って火鉢をかかへ、水鼻をススリながら斯くは荒川“ハナミズ”の記を作る……。先生の“ハックション”という響が聞こえるようだ。

以上の文を見ると先生は如何にも酒豪らしく、また風貌から見てもその通りであるが、実は意外にも酒は一滴もたしなまず、この名ははじめから御長男の一郎さんに譲られて居った。三崎の臨海実験所へ行った折りに命ぜられて三崎の町まであんころ餅を買いに行ったことを覚えている。

今一つ意外なことがある。海藻学専門であるから、荒海に行く船の舳先に立って叱咤激励している姿が目映るのであるが、同じ海藻学の恩田経介さんの蔭口によると実は

トンカチなんですよとのことであつた。

ここで少々方向を変えて学問上の先生の御努力のあとを偲んで見たい。勿論先生は我國の近代海藻学に関して遠藤吉三郎さんとともに開祖であつた。永年の目的として海藻図譜の作成に努力して来られた。細かい銅版用の原図を自ら画かれ、永年続けて自費出版をされて来られた。この原図はいま科学博物館に保存されている。

また総まとめとして日本海藻誌の編集をなされた。この中には私がはじめて下田の海岸で採った熱帯系の *Valonia* の写真を載せて下さつた。また著作の一つに藻類系統学がある。この巻頭には Schmitz 博士の写真を載せ、次の記事が添えてある。“明治 22 年予の海藻学を専攻するや、就て学ぶの師なく、疑を質すの人なし、幸に De Toni 氏に依り Dr. Fr. Schmitz 氏の知る所となり爾来氏に就て学ぶ所多し……”。この書物の

出版に当って内田老鶴圃の主人はどの位売れそうですかと尋ねたところ、确实なところ 3 部位かねと真面目に答えたという。

肩の凝らない書物に“趣味から見た海藻と人生”がある。“話上手についのせられて、だまされて咲く室の梅……という手際の程はちと請合兼ねるが、読んで肩の張らぬだけにはしたつもり”という緒言通り冒頭から“春風に笑顔こぼる花の山、其愛きょうに誘はれて、けふ一日を桜狩、尽きぬ眺に暮告る、鐘は上野か浅草の其賑を他所にして、立出て見ればほのぼのと、霞にへだつ安房上総、潮路遙に大島の煙は雲か三原山、

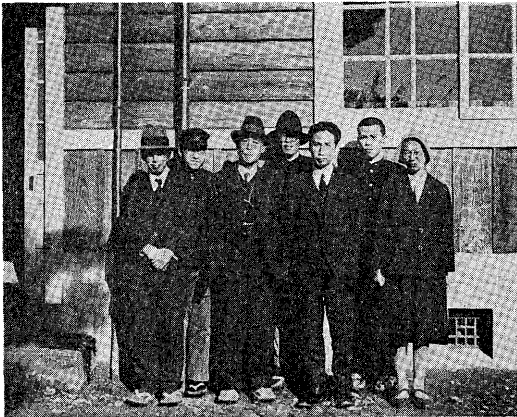


図 2. 下田の東京文理大実験所前にて (1933, 3). 左より小林, 伊倉, 岡村先生, 池田, 三輪, 根来, 安部の諸氏。

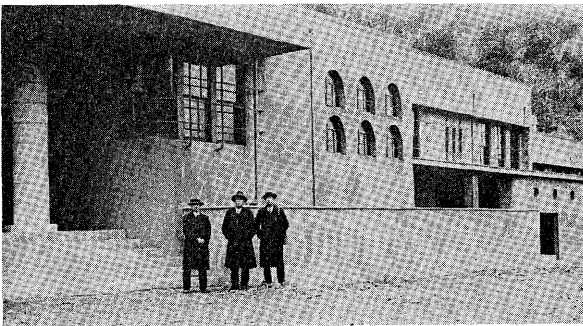


図 3. 下田の三井海洋研究所前にて (1933, 3). 左より小林, 岡村先生, 加藤氏。

浪に群れ立つ磯千鳥，羽風かはしてひらひらと，袷羽織の袖が浦，江のしま衣を竜の口，片瀬につづく腰越や，蛤袴のうら表，二つ合せて鶴沼の其糸はしを由井ヶ浜，袖ヶ浦につづくなる，七里ヶ浜の浪ぎはに，散り敷く玉藻振り分けて，見れば数ある其の中に，緑色濃きみるぶさや，蜀紅の錦其ままに……”と続いている。

この七五調では私も先生からほめられた経験がある。それは昭和6年にアリューシャン列島調査に出かけた折り駄句ったものである。“卯月半ばのとある日，都の春をよそにして，北のコースを極地へと，キューリル，オロシヤの沖をへて，ベーリングの荒海に，その身はたのむ笹小舟，三十三度のかたむきに，S.O.Sの信号や，又斯る事のアリューシャン，初めにたどる一孤島，無毛の山野におどろきて，アツツはいやで御座んすと，とむるなさけのそではらひ，火山の煙右に見て，行方は遙かアトカ島……。”

先生はまた江戸時代の黄表紙のかくれた研究者であつたらしく，文理大の私の研究室で，同学の教授を前にして，これに就いて解説して居られた。当時の文理大の学長は森岡さんで，先生とは旧友の間柄であつたようである。森岡君も大学の業務では大分悩んで居られるだろうと言って居られた。当時先生は水産講習所長で，余程悩みがあつたらしく，つい旧友の心に同情したのだと思う。

昭和5年ごろ先生の御自宅で我々若い者達のために私塾を開いて下さったことがある。医学の吉川春寿，海藻の岡田喜一君等10人ほどが塾生であつた。お宅は目白の女子大学前の坂の中途にあつた。沢山の文献や標本を前にしての講義は大変な難いものであつた。

先生は昭和10年8月21日に68歳で他界された。今の私の年齢に比べて10年近い若さであつた。そのお通夜には私も末席に加えさせて戴いた。望月内務大臣も旧友として出席して居られた。原田三夫さんは先生の指導の下で伊豆半島のアオノリの分類学的研究をして居たので同じく顔を見せて居た。彼の思い出の七十年という著書に“先生の追悼会で海藻を専攻していた二人の若い人が私の前へ来て，私の論文の結論は全くその通りだ（正しい）と云ったので，さらに喜んだ”。私は東大植物教室に保存されていた彼の論文は見えて居たのである。この若い二人というのは岡田喜一君と私とを指したのである。

先生の一生のうちで私が御指導を受けることが出来たのは最後の10年ほどに過ぎないが，その感銘は真に深いものがあつた。(国立科学博物館)